BONJOUR

〈l'artisan〉
アルチザン

vol.28 2015.9.15 発行

ASSOCIATION NIIGATA-FRANCE
●発行 新潟・フランス協会
●新潟市中央区東堀通6-1030(丸屋本店内)
●TEL・FAX 025(225)2424
●http://gnfrance.com/

職人の心 Esprit de l'artisan

会長 本間 彊

荒れ狂った大学紛争を経て、社会に押し出されるように卒業した言わば全共闘世代である。嘴が黄色い団塊の世代が大量に世の中に排出された。僕もそのひとりだった。卒業式が中止となり、まだ薄ら寒い3月、単身東京から京都に向かった。土壇場で家業を継ぐ決心をして菓子屋に奉公することになった。隅々に行き届いた京都の老舗菓匠である。お菓子の職人が僕に務まるのだろうか。大きな不安を抱えながら社会に旅立った。日本が高度経済成長へと走り出した昭和44年のことである。

当時の職人は今日の「パティシエ」などと呼ばれる華やかなイメージとは違って、やや暗い下積みの仕事だった。奉公して種々雑多な人々の狭間で、それぞれの生き方を見せてもらった。中学を卒業して働きはじめ、腕を磨いた先輩職人たちが大勢いた。年下でも先輩である。先輩は絶対であった。しかし徒弟制度ではあっても、これほどの実力主義の世界はないだろうと思った。学歴や個々人の属性など関係ない。お菓子づくりの技術が高いかどうか、売れる製品が作れるかどうかがこの業界での当たり前の基準だった。仕事が厳しく夜逃げをする見習いは後をたたず、僕はひたすら脱落しないようにとそれだけを思って働いた。22歳なりの小さなプライドがあった。1年が経ってようやく認められるようになったと思う。と同時に店の社長でもある親方や先輩、同僚たちからの温かい励ましと共に親身な指導へと微妙に変化していった。そしてある種の絆が生まれたようにも感じた。

職人の端くれになれたことが嬉しかった。その絆は有難いことに今も続いている。京都での3年間は社会への登竜門であり、菓子業に就くための職人の精神（Esprit de l'artisan）に触れる貴重な時間でもあった。平安京遷都以来、千年余の都だった京の歴史と伝統の中で育まれた菓匠。町の空気や季節の風習を肌で感じながら、老舗の菓子道を教わったことを誇りに思う。お菓子は文化であるが、文化を創造するのは職人の技術とエスプリである。

モードの匠 TAKUMI

MICHEL KLEIN社 デザインスタジオ
ディレクター兼コレクション総責任者

佐藤康司 Koji Sato

（パリ支部会員）

MICHEL KLEIN
2015年・16年
秋冬コレクションより

1998年 渡仏のため大学法学部中退。
1999年 Academie Internationale de Coupe de Parisにて、モデリスト科を首席で卒業。
2000年 イヴサンローランオートクチュールのタイユールのアトリエで研修後、エルメスで当時クリエイティブディレクターだったマルタンマルジェラ氏に師事。
2001年 MICHEL KLEIN社でミッシェルクラン氏のアシスタントデザイナーになる。
2003年～ アジア圏のライセンシーであるイトキン㈱の運営するMICHEL KLEINのサブライセンス（腕時計、アイウェア、バッグなどアパレル以外のアクセサリーなど約20アイテム）に向けてのパリ発のデザイン責任者に就任。
2005年～ ファーストライン、Cher MICHEL KLEINのプリント柄、刺繍柄のデザインを担当。
2010年～ MICHEL KLEIN社のデザインスタジオディレクター兼コレクション総責任者。
2013―14年 個人として辻仁成監督映画「離れながら見る夢」の衣装デザインを担当。

1.子供のころの将来の夢・パリでデザイナーになった理由

父の影響で幼い頃から絵を描いていて、自分の絵の才能を活かした仕事に就きたいという目標は小さい頃から持っていました。

大学の時にとにかく日本とは全く別の世界を見てみたいと思い立ちフランスに渡り、語学学校に通いながらパリでファッションに触れ、その影響を受けモードの世界に入りました。

2.パリでの仕事・コレクションの時期

現在の会社ではコレクションのディレクション、デザイン、プリント柄の作成を始め、パターンや縫製もやりますし、アトリエや各工場とのやりとりや生産、日本のライセンスデザインに至るまで様々な仕事をしています。コレクションを発表する時期は3月と10月で現在は2016年春夏コレクションの発表の用意をしているところです。

会社では日本人は僕一人なので、フランス人の上司や多国籍な同僚や部下とのコミュニケーション等、ストレスが溜まることも多々ありますが、それぞれがしっかりと個人の意見を持っているので、ぶつかり合いながらも全体で良い方向に行くことが多いです。

3. パリでの休日

生活においてパリのいいところは街全体の時間の流れが緩やかなこと。そして、気軽に本物の芸術に触れることができることです。そういう日々を意識しながら多くのものをインプットして自分の中でミックスすることで、自分のフィルターを通して様々な形でアウトプット出来ているのだと思います。

4. パリ支部入会のきっかけ

きっかけは現支部長を務める彫刻家の原田哲男さんがパリ支部発足以前に主催していた「新潟友の会」という県人会のようなものに入っていたことです。当時は、たまに会って近況報告をしながら食事をするような会で数名しかいませんでした。その原田さんから、パリ支部の話を聞き、誘われて入会することになりました。

パリで活躍する新潟出身の方は各分野にまだまだいるので、これからさらにネットワークが広がっていくよう協力していきたいと思っています。

新潟の会員の皆さんは、リアルタイムで届くフランス発の新しい情報や、新潟出身の方達の活躍を是非楽しみにしていて下さい。

文化の記憶館の

パリの蕗谷虹児（ふきやこうじ）

にいがた文化の記憶館 学芸員 石垣 雅美 Masami Ishigaki

新発田市出身の蕗谷虹児（1898～1979年）は、少女雑誌の挿絵画家、童謡「花嫁人形」の作詞家として知られています。

虹児は19歳の父傳松と16歳の母エツの長男一男として生まれました。働きながら南画を習っていた時に画才を認められ、新潟出身の日本画家尾竹竹坡に弟子入りし、日本画の基礎を学びました。

1920（大正9）年に竹久夢二の知遇を得たことで「少女画報」で挿絵を描き始めました。21年新年号から同郷の吉屋信子の連載小説『花物語』の挿絵を担当したことで一躍人気作家となり、後発雑誌「令女界」などの表紙を飾りました。24年「花嫁人形」の詩と絵を発表してから1年半後の25年秋、本格的に絵画を学ぶため、妻りんを伴い渡仏しました。

1920年代、パリでは知識人や文学者、芸術家らが自由や新しい価値観を模索していました。この時代、カフェやナイトクラブなどで夜通しお祭り騒ぎが行われていたため、Les Années Folles（狂乱の時代）と呼ばれています。普仏戦争後から第一次世界大戦開戦前までのベルエポックと呼ばれるパリで栄えた時代に芸術の都に住みついた芸術家たち―スーチンやモディリアーニ、シャガール、フジタなど―が、モンパルナスを拠点に精力的に活動していました。

パリで東郷青児らに出迎えられた虹児はサロン入選を目指し、春の公募展サロン・ナショナル、秋の公募展サロン・ドートンヌや在パリ日本人美術家展などに出品しました。

26年のサロン・ドートンヌ初入選作《家族》（のちの《混血児とその父母》）には西洋人の船長と日本髪を結った日本女性、彼らの子どもが描かれた肖像画です。本作の制作直前、虹児夫妻に日本に残した長男が急逝したとの訃報が届きます。深い悲しみの中で制作された本作は、日本画で用いられる絹本に面相筆で面取りされていますが、構図や彩色は西洋画のそれのようです。虹児は本作で西洋画と日本画の融合を目指していたといわれます。虹児が晩年まで手元に残していた本作は、今年5月にパリで開催された回顧展で21世紀のフランス人に賞賛されました。

にいがた文化の記憶館では12月5日（土）から企画展示「パリの蕗谷虹児」を開催します。パリ時代の蕗谷虹児の資料や作品を展示予定ですので、ぜひお越しください。

にいがた文化の記憶館
〒950-0088 新潟市中央区万代3-1-1 新潟日報メディアシップ5階
TEL. 025-250-7117 FAX. 025-250-7040
URL. http://nmmc.jp E-mail. kiokukan@honey.ocn.ne.jp

紙アートの

Kami-art

アトランティック・ジャポン協会 会員
エオルメ 小林 俊恵 Toshie HEAULMÉ-KOBAYASHI

Kami-artという名前で和紙、水引を使ったアクセサリーと小物の制作を始めて、今年で3年になります。ネットブティックやイベントでの販売と、ワークショップを行っています。折り紙、水引等のテクニックを教えながら、生活に密接に関わる日本の紙文化を紹介しています。制作のモチーフとして、鶴、亀、あわじ結び等を取り入れ「鶴は千年、亀は万年生きると言われ、長寿のシンボルです」とか「両端を引く程に結び目が固くなるあわじ結びは、強い結びつきを表します」等の説明をしています。

優美な柄の千代紙はよく知られた存在ですが、千代紙以外にも魅力的な和紙はたくさんあります。新潟の福島潟のヨシ和紙もそのひとつ。環境保全のために刈られた葦100%のヨシ和紙でカードや文香をつくり、透け感の美しい落水紙や板締染紙でアクセサリーや行灯をつくり、紙の生い立ちも合わせて紹介しています。

私の仕事場は、再開発最前線のナント島造船所跡地にあります。工場廃屋を利用した集合オフィス・Solilabは、Economie Sociale et Solidaire（連帯及び社会経済）というコンセプトの元、様々な業種が共同で継続可能な社会のための試みを行うユニークな場所です。Kami-artとしては、和紙を使ってオブジェのリサイクルをしたり、書道の反古紙でアクセサリーや再生紙をつくったり、日本の「もったいない」を活動に反映したいと考えています。

Kami-art
Toshie HÉAULMÉ-KOBAYASHI（エオルメ小林俊恵）
E-mail : kamiart.jp@gmail.com
Blog : http://kami-art-jp.blogspot.fr/
Facebook : www.facebook.com/Kamiart.jp

シネコンの TAKUMI

「笑う男」シネ・コンサートを終えて

パリ支部 副支部長　三村　兼哉 Mimura Kenya

「笑う男」シネ・コンサートを終えて、ひと月ほどが経ちました。10日ほどの日本ツアーを終え、庭の木々の葉も緑がだいぶ濃くなりました。

パリはすでにバカンスの季節、一番暮らしやすくなる季節です。庭の緑を眺めながらこの小文を書いています。頭をよぎるのは、「フランス八重奏団」と共に過ごした日本での10日ほどの熱狂的とも言える日々のことです。まさに夢を見ていたような感じです。未だにその夢がさめきっていないようで、日本での公演の際の感動が身体を熱くします。

この5月31日から6月7日まで毎日移動、公演の連続で、フランスから日本公演に参加した「フランス八重奏団」の演奏者の皆さんもよく音をあげず、最後まで遂行してくれたものと驚いています。フランスではニュースをはじめ、あらゆる機会にフランス人の文句たらたらの状況をいつも見ているからです。

この「笑う男」の企画は本格的にスタートしたのは昨年の4月ですが、でも直接のきっかけは一昨年4月末に日本から来た知人、友人らとパリの映画館でこの「笑う男」シネ・コンサートを見た時です。この時の感動を東日本大震災の被災者の方々と共に分かち合いたいと思ったのがそもそもの出発点です。

企画の実現には、いくつかの問題をクリアしなくてはなりませんでしたが、この感動を共有することについては、それほど心配しませんでした。今まで、何回か「笑う男」を見て、観衆の感動する姿を実際に目の当たりにしたり、また文献や関係者からその反響について聞き及んでいたからです。問題は資金についてです。これには頭を痛めました。赤字は避けられないと、覚悟をしました。

それから「公演会場」についてですが、これにもだいぶ悩みました。結局、新潟公演を頭に持って来て、最後を岩手県の宮古市で締めくくることにしました。
途中さいたまの「彩の国さいたま芸術劇場」も選びました。この劇場も思い入れがあります。岩波ホールの高野悦子女史がここで「笑う男」をフランス八重奏団の生演奏で日本に紹介したところだからです。

今回の「笑う男」の企画の最中に、私は70歳という節目の年を迎えました。その機会に70年の私の人生を振り返るということもしました。その結果、「人生は出会い」ということをつくづく思いました。人との出会いはもちろんのこと、先人のことば、音楽、本などあらゆる出会いが私の人生を紡いで来たことを実感せざるにはいられませんでした。

そして、アルフレッド・アドラーという人の教えについて書かれた「嫌われる勇気」や「一歩踏み出す勇気」に出会い、強い共感を受けました。まさに私の歩んできた人生の集約という感じでした。

今まで血となり、肉となってきた教え、例えば「則天去私」「天地人」「成せばなる…」「あるがままに」とかいろいろなものが全てアドラーの教えに辿り着くための準備だったのではないかという思いです。

今までの仕事でもそれが言えます。最初はNHK、そして通訳、翻訳などを経て、弦楽器商という職業についたのも、この「笑う男」の企画を準備するためのものではなかったのか。はたまた「東北復興支援のための音楽会」という支援活動をするためではなかったのか。いろいろな想いが私の頭の中に渦巻いています。

今回の「笑う男」シネ・コンサートでは数え切れないほど多くの方々のご支援をいただきました。なかでも高校時代の同窓生たちから、大きな協力を得ました。50年以上も音信不通だった人たちです。本当にありがたいことと思います。

「笑う男」シネ・コンサートがまた日本で実現され、多くの人に感動を与える機会があることを心より祈っています。

声楽の TAKUMI

愛のうた

パリ支部会員　今井　あい Ai Imai

7月新潟で、「愛のうた」と題しリサイタルを行いました。今回は、2013年12月のリサイタルは声帯を痛め突然中止し、ご迷惑をかけてしまった皆様への恩返しでした。歌えない間、リハビリの間、私の歌を待ち、応援して下さっている方々への、感謝の気持ち、たくさんの愛情を込めて歌いました。

声を痛めて一年くらいは、恐怖との戦いでした。

また声帯を痛め、二度と歌えなくなってしまうのではないかと。

しかし、痛めた後、声帯への負担をかけないようにと、楽に歌えるようになったのです。

人体とは不思議なものです。怪我をして知ることがあるのですね。

無理をせずに、大切にしようと思うようになりました。

そしてまた、いろいろな可能性を考えるきっかけともなりました。

今回は、オペラのアリアを入れず、歌曲や、ミュージカルの曲、中島みゆきさんの時代を入れるなど、バラエティーに富んだ選曲をしました。それは、時を超え、ジャンルを超え、国を超え、それでも、そこには共通する、心に通じるものがあり、それを歌いたいと思うようになったからです。クラシックを演奏する演奏家は、クラシックのみになる事が多いです。クラシック音楽の勉強は、長い道のりです。毎日のストイックなまでの練習により、超人技と思われる技巧を習得し、華やかな曲をいとも簡単そうに演奏します。それは、ひとえに、どんな音楽も、難しいと思わせず、息をするように、自然に伝える事ができるようになるためです。ですから、クラシックで学び、習得した技術や表現をジャンルを超えて使う事で、新たなクラシックの魅力や可能性を、皆様にお届けしたいと考えるようになりました。

日本を離れ、10年あまり声楽の道をひたすら駆けてきました。その間に見えてきた、世界から見る日本、日本から見る世界。そのどちらの感覚も体験し、体感し、どちらにも身を置かず、また身を置いて、その不思議な感覚を持って歌を歌った時、みなさまに、また違った世界に巡り合えていただける、そんな歌を歌っていきたいと思っています。

人形劇の TAKUMI

星の王子様

慶應義塾SFC、新潟大学フランス語講師
クロエ　ヴィアート Chloé Viatte

「星の王子様」Le Petit Prince 私の休憩タイムの伴うマグカップに「星の王子様」の有名なフレーズが「目に見えない…」と刻んであります。皆が好きな言葉で誤解されるくらいよくTシャツ・文具などに利用され、70年前に書かれたSaint-Exupéryの美しい文は今の若い学生さんにどう響くでしょうか。今年の夏に7月27日1時から2時半、新潟大学の外国語のパフォーマンスの授業に関われた25人は「星の王子様」のお芝居をチャレンジしました。優しい客の前で新潟・フランス協会が作製してきたお人形とともに自らで日本訳を考えて、フランスのミュージカルの曲を合唱して、アニメのソングを歌って、楽しんで上演しました。

フランス語・日本語・バイリンガルの場面があって、「星の王子様」を語ったり、歌ったり、踊ったり、ラップ風にしたりして、物語をそれぞれユニークな形で表現することができました。特に印象深かったのは小飯塚さんの才能のおかげで幻の蛇、優しくて賢い狐や魅力的な鳥たちも登場したことです。人形をもうちょっとうまく使いこなすには時間が欲しかったですが、ありがたくコラボさせてもらいました。最後は観客さんに「羊」を書いてもらったお礼に参加者が自分の「目に見えない」宝物をバラにつけて贈り、猛暑にも負けずにSaint-Exupéryの物語を新潟にお届けしました。「絆」を教えてくれる「王子」の大事なメッセージを全身で覚えたような気がします。来年も新しい演目を挑戦するとき、すばらしい人形と一緒に楽しい舞台ができますように！一緒に共同舞台ができますよう！と思っております。Merci

人形劇の TAKUMI

ラ・フォル・ジュルネ新潟2015 “熱狂の日”に参加して

理事　小飯塚　眞理子 Mariko Koiduka

昨年に続き、今年もキッズプロジェクトの人形劇に（一社）新潟・フランス協会は協力参加することになりました。1月29日の理事会で、昨年同様に会員有志のご協力によるANF劇団のメンバーで5月10日に公演。

今年のテーマはパシオン～恋する作曲家たち～です。パシオンには受難の意味もあります。そこで物語の要素として受難・夢・冒険・友情・復活で構成しキッズにわかりやすく表現を計画。題名「森のパシオン」。

今年はとても贅沢な公演を計画しました。なぜなら、ピアノ演奏とソプラノの歌声の生音で物語の流れを構成しました。

練習は3月12日からANFの隣室をお借りしてスタート。練習は12回でしたが全員集合は不可能でした。全員揃ったのは本番当日のリハーサルのみでした。

ANF劇団の団員の本番の強さには驚きがあります。結束力、集中力、サービス精神等演じる事を楽しんで公演は大成功しました。入場者は昨年より49名多く633名。

成功の源は団員もとよりご家族のご協力のお蔭様と思っております。関係者の皆様、ご来場いただいた方々に心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

人形操作：五十嵐厚　伊藤薫　小松恵美子　高橋奈緒美　高松智子　佐野光助
中澤新一　平本勝　樋口真弓　伏見眞利子
声　優：五十嵐ゆき子　石橋モユ子　萱場和彰　小山瑠美子　高橋奈緒美
新田賢仁　樋口真弓　広瀬透　伏見眞利子
ピアノ：地濃貴子
ソプラノ：小山瑠美子
映　像：萱場和彰
音響・照明：広瀬透
人形・道具製作：小飯塚眞理子　小松恵美子
原作・脚本・演出・監督：小飯塚眞理子

Cast